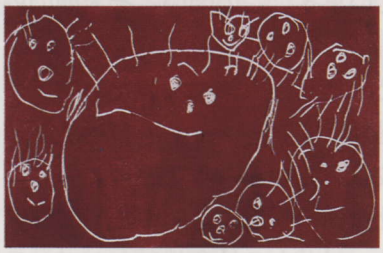
館報

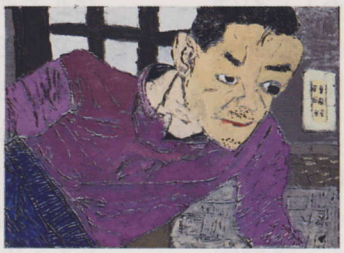
教育記念館

No.73

平成21年11月 発行

第28回　富山県版造形教育作品展　特選作品


わたしのかぞく（3才）


今日はのんびり（小5）

キャベツ（小5）

くつ（中3）

笑顔（小6）

未来を見つめて（中2）

およぐイカ（小1）

ヤマメが飛んだ（小4）

さあ、およぐぞ（小1）

ふしぎなキョウリュウ（小2）

※特選作品28点中の10作品掲載

主な内容

◎教育時評　富山県教育委員会　　理事 教育次長　荒井　克博 …… 2
◎財団事業、今後の予定 …… 3
◎特別展「富山県の定時制教育80年のあゆみ」展 …… 4
◎恒例展「富山県版造形教育作品展」「さんすうワールド展」
「きらめき未来塾」 …… 5
◎第19回　郷土の先賢顕彰者　●源氏鶏太　●瀧口修造 …… 6
●左　幸子　●継続顕彰者 …… 7
◎恒例展「子どもの目・自然不思議発見写真展」　あとがき …… 8

発行所／財団法人　富山県ひとづくり財団　富山県教育記念館　〒930-0018 富山市千歳町 1－5－1
TEL(076)444－2000　FAX(076)444－2001　E-mail:toyama@t-hito.or.jp　http://www.t-hito.or.jp
（教育記念館会議室ご利用の場合　☎(076)433－2770）
発行人／富山県教育記念館　館長　齊藤和夫　　印刷所／いおざき印刷株式会社

子どもの社会化と遊び

富山県教育委員会
理事 教育次長　荒井　克博

「人間は投企され、投企する存在である」、これは、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー（1889～1976）の言葉です。人間は自らの意志にかかわりなく、この世界に投げ込まれ、否応なくこの世界に生きなければならない。かくして人は「どうして自分はここに生きているのだろう」「生きることにはどのような意味があるだろう」という疑問や不安に駆られる。しかしやがて、「自分はこの世界に投げ込まれており、決して逃れることはできない」という現実を自覚せざるを得ない。この自覚をとおして人間は新たに自分を捉え直し、新たな可能性に向けて自らの主体的な意志に基づく生き方、自由な存在としての生き方ができる。ハイデガーは概ねこのようなことを述べています。

人間は、全く偶然にもその時代、その社会に生まれ、その時代・社会の文化（言葉、文字、社会習慣、衣食住の様式、科学技術や知識、道徳や価値観、宗教等一切のもの）を意識的、無意識的に学び、それを内面化していく、いわゆる社会化されていきます。いわば人間はその社会によって、人間として作り上げられるのですが、人間にはこうした受容的な側面ばかりではなく、自ら新たな文化を創造していく能動的な力も備わっています。

その力の根底にあるものは、「知りたい」という純粋な欲求にほかならないのではないでしょうか。幼な子が、周囲の親や大人に「これは何」「これは何故」と問いを発し続けることに通じるような、それが何の役に立つのか、自分にどのような利益をもたらすのか分からないが、とにかく知りたいという原初的なこの欲求が人間を今日まで突き動かし、今日このような人間社会が成立させてきたと言えるのではないでしょうか。

ヘレン・ケラーの先生サリバン女史は「なぜか」の問いこそ「子どもが理性と内省の世界に入る扉だ」と述べています。この問いこそ人間の内発的な文化を習得し、好奇心を駆り立て科学的な探求心を育むなど、ヒトが人間になるために欠くことのできない過程です。

今日の学校教育もこのような原理に基づいて個性の伸張や社会性の陶冶が進められております。しかしながら、子どもの社会化にとって、それ以上に必要なものは、子どもの自発的な遊びです。子どもにとって遊びは何かのためではなく、遊び自身を楽しむ、最も自発的な行動であり、これを通じてその社会の文化の基本を学び、他者との関係の中で自己を確立する「自立」する力を身につけていきます。また、このような人と人の「関係」やモノとモノとの「関係」など目に見えない抽象的な概念に関する思考力を身につけるのは、第二反抗期の前哨戦ともいうべき十歳前後とされており、「九歳の壁」「四年生のつまずき」などの言葉が用いられています。この「大人になるための大切な第一の関門」（河合隼雄）を乗り越えるために必要なものが集団遊びであるとされ、近年教育学や社会学等の分野で科学的な解明に取り組まれています。

大人にとって、文化を伝承し創造的に発展させる場は仕事の場（広義の）です。大人は仕事の中で自分の能力を発揮し生涯にわたって自らを錬磨し人格も磨いていきます。子どもにとっての遊びは、大人の仕事に相当するといっていいでしょう。しかしながら、今日の子どもに見られる孤独な遊びや自然と切り離された遊びには問題があるといえます。今日、子どもの社会化や自立を巡って様々な課題が生じていますが、これを解く鍵の一つが遊びであると考えます。子どもの遊びを保証する場や機会を社会全体でいかに確保していくか真剣に考えていく必要があると思います。

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

主催　（財）富山県ひとづくり財団

平成21年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業（助成対象校１校に10万円助成）

── 将来にわたって、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもつ子どもの育成を願い、
地域と連携して「ふるさと学習」に取り組む学校を支援します ──

助　成　校	実　践　テ　ー　マ
立山町立新瀬戸小学校	地域の伝統文化を生かす指導の在り方
立山町立釜ヶ渕小学校	地域力を生かす「総合的な学習の時間」のあり方
小矢部市立大谷小学校	仲間とかかわりながら地域に働きかけ、地域のよさに気づき、ふるさとを大切にしていこうとする子どもの育成を目指して
南砺市立平小学校	平地区の民謡を通して、郷土のよさに触れ、郷土を大切にする子どもの育成 ～平の民謡を受け継ごう～
砺波市立砺波東部小学校	自分たちの住んでいる地域（砺波市）の自然環境や社会環境について、自ら体験したり調査したりして、地域のよさを見つけ、伝えることができる子どもを育てる。

平成21年度「水みらいプロジェクト」支援事業（富山県ひとづくり財団及び富山・水・文化の財団から各五万円助成）

── 小中学生に「水」に関する学習や調査活動を通して、「水」に対しての興味を高め、
「水・環境」の大切さを認識する実践に取り組む学校及び団体を支援します ──

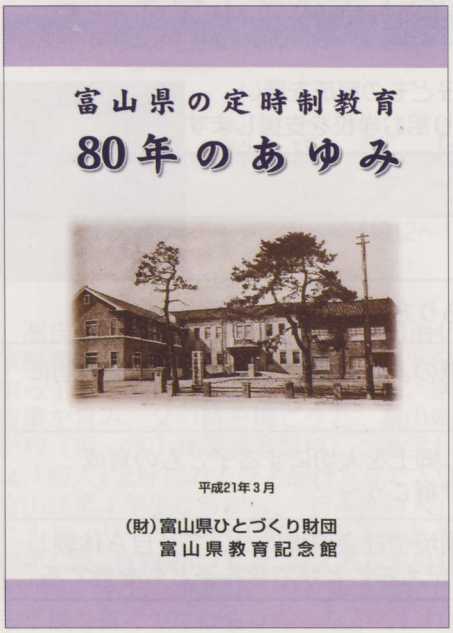
助成校、助成団体	研　究　テ　ー　マ
射水市立大門小学校	大好きなふるさとの川を見つめよう
富山市立池多小学校	川や田んぼの生き物調査
富山市立大久保小学校	いのちを育てよう　～「大久保せせらぎビオトープ」作りを通して～
富山市立上条小学校	わたしたちの上条（上条用水を探る）
上市町立相ノ木小学校	豊かな水　～米作りと水～
くろべ水の少年団	①水生生物の調査 ②黒部川本流と町の中を流れた川の水質を比較調査
入善町立入善小学校	扇状地をつくる米、育む水　～未来に受け継ぐ豊かな水～

毎年、４月に開催される「県小・中校長会」にて、上記支援事業の実施要項を配布しています。

平成21年度後半の展示予定

○第27回「特別支援学校・みんながんばってます作品展」	10月31日（土）～11月15日（日）
○第21回「富山県造形教育作品展」	11月21日（土）～12月６日（日）
○第５回「アイディアロボットフェスタ・ロボット展」	12月12日（土）～１月24日（日）
○第20回「富山県中学校美術展」	２月６日（土）～２月21日（日）
○第57回「富山大学学生卒業記念書展」	２月27日（土）～３月５日（金）
○第３回「富山県版造形教育作品展・秀作回顧展」	３月13日（土）～４月11日（日）

富山県教育記念館　研究紀要
「富山県の定時制教育80年のあゆみ」 平成21年３月 発刊



本県の定時制教育が始まって以来、多くの有為な人材を輩出し、その人材が混沌とした昭和の初めから戦後の混乱期の克服、社会秩序の変化への対応や経済の建て直しなどに力を発揮し続けたことは紛れのない事実である。そして、時代は変わり続ける。信頼や誠実が投げ捨てられているかのような今日、自己を生かし、真摯に学び、一方の時代のリーダーを目指し努力を惜しまないでほしいものである。また、魂の入った教育を行い続け、生徒たちを鍛えてほしいものである。

本書は、本記念館の教育資料部会専門員である県内小、中、高校の先生方に校務多用な中で調査・研究・執筆をいただき、また、県内関係高等学校をはじめ図書館や教育センター、企業等の協力を得て完成したものであり、それぞれに心から感謝申し上げますとともに、多くの方々に本書に目を通していただき、今後の高校教育の参考にしていただければと思います。

（「発刊にあたって」より抜粋）

富山県教育記念館　館長　齊藤　和夫

目　次

「目で見る定時制教育のあゆみ」
「図説　富山県の定時制教育のあゆみ」
「発刊にあたって」
Ⅰ　富山県定時制教育80年のあゆみ
Ⅱ　夜間中学校の誕生
　＊私立富山中等夜学校　＊富山県立富山夜間中学
　＊富山県立雄峰中学校
Ⅲ　定時制・通信制の発足
　＊新制高校発足の中で　＊マクレラン旋風とその後
　＊当初における定時制・通信制の実態
　＊富山県総合計画と定時制・通信制
Ⅳ　産業教育と定時制・通信制
　＊産業教育の推進と定時制・通信制教育の振興
　＊第三次富山県総合計画と定時制高校の再編
　＊昭和30～50年代の各地区別定時制教育の状況
Ⅴ　生涯学習時代の定時制
　＊生涯教育における高校教育の役割
　＊定時制教育の改革　＊生涯学習校の設置へ
Ⅵ　多様化した定時制
　＊広域通信制課程の高校との連携
　＊サポート校
Ⅶ　回想でつづる定時制
Ⅷ　座談会「定時制の現場では・・・」
Ⅸ　資料
　＊富山県の定時制・通信制教育年表
　＊教育課程及び使用教科書　＊校歌・学園歌
　＊部活動　＊定時制生徒会誌一覧
　＊戦後の定時制・通信制在籍生徒数の変化
　＊定時制高校生の意識調査・・・他

《特別展》「富山県の定時制教育80年のあゆみ」

４月25日(土)～６月７日(日)

＊雄峰高校通信制一部履修生として、５年間学びました。懐かしくその頃を思い出します。
＊50年前の自分達の学んだ定時制の重要性と大きな感激を味わいました。
＊今、必要な歴史の記録だと感じました。
＊定通教育にかかわった者ですが、これだけの力作、敬服しました。

◆◆◆ 第28回 富山県版造形教育作品展 ◆◆◆

6月13日(土)～7月12日(日)

毎年２月に開催される「富山県版造形教育展」で展示された約1,000点の中から選ばれた約100点の優秀な版画作品を当館で展示しています。さらにその中から20数点を特選作品（今年度の特選の一部は表紙に掲載）として保管しています。

貴重な図工・美術の参考作品ばかりです。貸出可能です。申し込んでください。

◆◆◆ きらめき未来塾（夏休み期間中） ◆◆◆

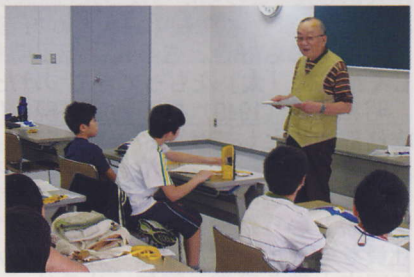
開講式
村井和塾長あいさつ

「スペシャル公開授業」
講師　秋山　仁
（数学者、東海大教授）

思考道場
県内講師（城下晴美、藤森一彰、森雅美、堀井祐一、池田充良）

お笑い道場
講師　三遊亭　圓窓
（落語家）

右脳活用道場
講師　ねじめ　正一
（詩人、作家）



日本語道場
講師　高梨　敬一郎
（関西国際大客員教授、元 NHKアナウンサー）

◆◆◆◆◆◆ さんすうワールド展 ◆◆◆◆◆◆

7月26日(日)～9月6日(日)

パズル&クイズ

「きらめき未来塾」に参加する小学生の子供たちに楽しんでほしいという願いから「マセマティカルワールド展」を「さんすうワールド展」に改称しました。今年のテーマは「パズル＆クイズ」。「図形パズル」、「さんすうクイズ」コーナーそして教具体験コーナーが賑わいました。「難しかったけど楽しかった」というのが挑戦した子供たちの感想でした。快い難しさ（抵抗感）が支持されたようです。

第19回　郷土先賢室顕彰者紹介

ユーモア小説の直木賞作家

源氏鶏太（げんじけいた）

（1912～1985）

源氏鶏太（本名田中富男）は、明治45年（1912）家庭薬配置業を営む父竹次郎と母コトの三男四女の末っ子として富山市泉町に生まれた。家は家庭薬配置業を営み、父の跡を継ごうと、富山県立富山商業学校（現・富山商業高等学校）へ進学した。学校では、「聖人」と呼ばれるほど品行方正で人望もあった。富山商業４年生ころから、「日本海詩人」のグループに入り、リーダー中山輝に師事するとともに詩作に熱中した。自叙伝に「私は、詩人として出発したと思っている。もし、あの頃、詩に触れずにいたら、その後小説を書く気にならなかったかもしれない。」とある。

昭和５年（1930）大阪の住友合資会社に入社し、経理マンとして精勤した。勤めのかたわら寸暇を得て小説を執筆し、昭和９年（1934）「村の代表選手」が報知新聞・ユーモア小説の第一席に入選し、翌年サンデー毎日募集の大衆文芸に「あすも青空」が佳作入選した。この頃から使った「源氏鶏太」のペンネームは、「平家」よりも「源氏」が好きで、「鶏」という字の感じも好き。さらに、源平時代の下級武士らしく最後に「太」をもってきてつけたという。

昭和24年（1949）泉不動産（現・住友不動産）の総務部次長として、東京へ転任した。自らの体験を基に、サラリーマンの泣き笑い人生を温かく描いた作品を書き続け、ユーモア小説に属するサラリーマン小説という新分野を開拓した。昭和26年（1951）社員をモデルにした短編「英語屋さん」等により第25回直木賞を受賞。同年、サラリーマン重役の哀感を描いた「三等重役」を発表し、戦後の荒廃と虚脱の中にいた多くの読者を明るい笑いとユーモアで魅了し、ベストセラーとなった。森繁久弥主演で映画化もされ、全国的なブームを巻き起こし、源氏作品シリーズ80数本の映画化のきっかけとなった。

源氏作品は、経済・社会の復活、経済の高度成長という戦後の我が国の進展に即応した幸福を夢見るサラリーマン小説である。作品の大半は勧善懲悪で、「暗さは現実社会だけで十分であり、小説の上では明るく善意にあふれた作品を」が創作の根本にあった。「人生において、ユーモアは不可欠である」の信条を「花には水を、人には愛を、生活にはユーモアを」という座右の銘に託した。

昭和31年（1956）勤続25年余で会社を退職し、その後は作家一筋に歩んだ。同40年代からは、「みだらな葬式」などの妖怪小説ともいえる新分野を開き、同46年（1971）「幽霊になった男」等で第５回吉川英治文学賞を受賞。同51年（1976）芸術文化に尽くした功労により紫綬褒章を、次いで同58年（1983）に勲三等瑞宝章を受章した。

昭和60年（1985）73歳で多彩な生涯を閉じた。

同62年（1987）生家跡の近くに「源氏鶏太文学碑」が建立された。

専門委員　村中　祥華

人の生きざまを演じた異色の演技派女優

左幸子（ひだりさちこ）

（1930～2001）

左幸子（本名額村幸子）は、昭和５年（1930）下新川郡泊町（現・朝日町泊）に古美術商の三男五女の長女として生まれた。両越国境に位置し、物流や文化の交差点として賑わった泊町は演劇・芝居の上演も盛んであった。

昭和22年（1947）高校卒業後、上京。東京女子体育専門学校（現・東京女子体育大学）に入学した幸子は、リズム体操を日本に初めて導入した藤村トヨ学長の指導を受け、身体の緊張と弛緩を駆使した立ち居振る舞いを学ぶとともに、体操選手としても活躍し、国体に出場した。

在学中に見た杉村春子の舞台に感激し、卒業後、高校・中学校の体育・音楽の教師となったものの、２年後に退職。俳優座で演劇を学び始めた。

昭和27年（1952）野村浩将監督「若き日のあやまち」で主演に抜擢。昭和30年には「女中ッ子」でも主演、寒村から上京し働く娘を初々しく溌剌として演じ出世作となる。その後の出演作でもバイタリティあふれる演技は高い評価を受け、左幸子の名声を高めた。

幸子は、当時の多くの女優と異なり、ごく短期間を除き、映画会社には所属せず、いい監督、いい脚本、いい作品の中で女優としての演技を突きつめようと努力を続けた。

昭和38年（1963年）、今村昌平監督「日本昆虫記」で戦中から戦後の時代の変化に転々縷々のうちに生き抜く女を演じた。時代の有り様をその容姿や表情、ことばにまで映していく表現力は絶賛され、国内の映画賞を総なめにした。また、羽仁進監督「彼女と彼」では、当時、団地族と呼ばれた妻の複雑な愛を表現し、日本人として初めてのベルリン国際映画祭女優賞を獲得した。昭和40年（1965）には、内田吐夢監督「飢餓海峡」で素朴な娼妓杉村八重子を演じ、役柄の人間性や境遇を巧みに表現した強靭な演技で、余人を寄せ付けない大きな印象を残している。

個性的な監督に磨かれた演技力は、田中絹代に続いて、日本で２人目の女性監督・主演となった昭和52年（1977）「遠い一本の道」に結び付く。鉄道屋の生きる姿を描いたこの作品には、当時の国鉄労働組合が異例の資金提供をしている。

また、テレビドラマにも活躍の場を広げ、金沢を舞台にしたＮＨＫ朝の連続ドラマ小説「北の家族」や山口百恵主演、増村保造監督の「赤い絆」シリーズでの母親役の好演もよく知られている。

平成13年（2001）11月７日死去、享年71才。
女優、左時枝は実妹。

スターの華麗さを越え、したたかに、しぶとく、たくましく生きるリアルな人と姿を心と体で演じきった女優であった。

専門委員　本村　雅宏

平成21年度も引き続き顕彰される郷土先賢者

シュルレアリスムを追い求めた詩人・美術評論家

瀧口修造（たきぐちしゅうぞう）

（1903～1979）

修造は、明治36年、富山県婦負郡寒江村大塚（現・富山市）に医師・瀧口四郎と妻たきの長男として生まれた。両親は医師の道に進むことを期待したが、絵を描いたり、文学書や古今の書籍を読んだりすることに興味を示す少年であった。両親が他界したこともあり自分の思うところへ進むことを決意し、富山中学校（現・富山高等学校）卒業後、慶應義塾大学に入学した。教授であった西脇順三郎との出会いから、モダニズム詩の運動やシュルレアリスム（超現実主義）の芸術を知り、アンドレ・ブルトンなどに影響を受けるようになった。

昭和３年には同人誌「山繭」にシュルレアリスムを踏まえた詩編「地球創造説」を発表し、翌年にはアンドレ・ブルトンの「超現実主義と絵画」を翻訳するなど、前衛芸術運動の旗手として次第にその名が知られるようになった。

戦後は詩、写真、美術、映画、音楽、生け花、舞踊などについて、広汎な芸術批評活動を行うとともに、ジャンルを超えて美術・音楽・舞台芸術など、さまざまな分野の芸術家が集まって前衛的な表現を試みる「実験工房」の活動を支え、現代美術の発展に指導的役割を果たした。

また、昭和26年から７年間、神田駿河台の「タケミヤ画廊」において、若手作家に自由な表現の場を提供する企画展を開催し、ここから多くのシュルレアリスムの芸術家が育っていった。

昭和33年、ヴェニス・ビエンナーレの日本代表審査員として渡欧した際には、アンドレ・ブルトン、マルセル・デュシャン、アンリ・ミショー、サルヴァドール・ダリなどを訪問し、海外の作家との交流を深めた。

昭和35年ごろから、デカルコマニー（転写画）などの創作活動に没頭し、晩年には交流のあった海外作家ジョアン・ミロと詩画集「手づくり諺」、「ミロの星とともに」などの共同作品を刊行した。

戦前から戦後にかけてシュルレアリスム芸術の第一人者としてさまざまな批評活動を行い、自らも詩人、美術作家として、日本美術史に大きな足跡を残した修造は、昭和54年、76歳でその生涯を閉じた。修造の歩んだ軌跡は、富山県近代美術館、多摩美術大学の瀧口修造文庫及び慶應義塾大学アーカイブスにおける作品や収蔵品からたどることができる。

専門委員　戸田　哲彦

北陸近代医学・科学の祖

黒川　良安（1817～1890）

新川郡山加積村（現・上市町）黒川に生まれる。父治助は医師。良安12歳の時、両親とともに医学の修行のため長崎に赴く。両親は７年後に帰国したが良安は長崎に残り修行を続けた。一旦帰国するが向学心やまず、江戸に上り蘭学を学ぶ。６年後、加賀藩医に迎えられる。藩は良安を頭取として金沢に種痘所を設立。これが現在の金沢大学医学部の始まりであり、続いて開設された養生所や医学館では良安が計画・運営の中心となり、医療や医学教育に功績を残した。良安は蘭学の第一人者としても広く近代科学に通じていた。

本県書道教育の礎を築いた書家

青柳　石城（1899～1977）

文部省教員検定試験習字科に合格し、26才の時に来県。高等女学校、女子師範学校の教員となる。教員として書道教育に専念できるようになると、作品制作に打ち込むと同時に書道文化の普及に強い関心をもつようになり、同志とともに北辰書道会を結成し、機関誌「臨池」を創刊した。昭和22年、中学校長に就任したが、２年間で退職。書作や書道の指導に全精力を傾け、数多くの書道人を育成した。昭和41年、北陸書道院の設立。石城は書展への出品は２回のみであり、才能と人生のすべてをかけて書道教育に没頭した。

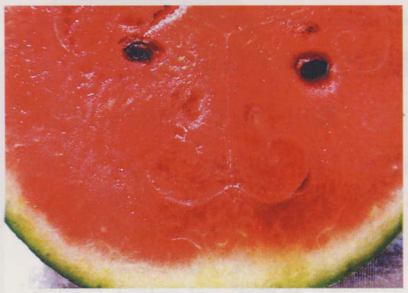
西陣織の技術改良に尽くした実業家

初代　川島　甚兵衛（1819～1879）

城端の呉服商上田屋の嫡子として生まれ、３歳の時、父と死別し母の実家に引き取られたが、９歳の時、母も亡くなった。13才の時に志を立て京都の呉服商「紅粉屋」に奉公した。忠勤に励み、25歳の時、京都六角室町に川島家を起こして、呉服悉皆業「上田屋」を開いた。甚兵衛は西陣織の技術改良と品質の向上に努めるとともに、研究を重ねて六丈絹の製法を城端、福光に普及させた。さらには、世界にも大きく目を開き、日本が開国すると、日本初の洋反物貿易を開始した。織物技術の改良、品質向上の精神は、二代目甚兵衛によって美術織物として花開くことになる。

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月13日(日)～10月11日(日)



「スイカ　ひげ男しゃく」

「バッタの兄弟」

「出会い」

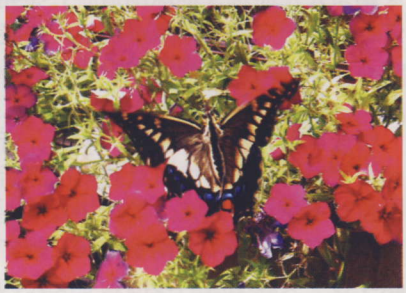
「マリーゴールドとカマキリ」

「きょ大なニホンヒキガエル」

「かたつむりがたまごをうんだ」

「幻想的な空」

「くもり空で見えた日食」



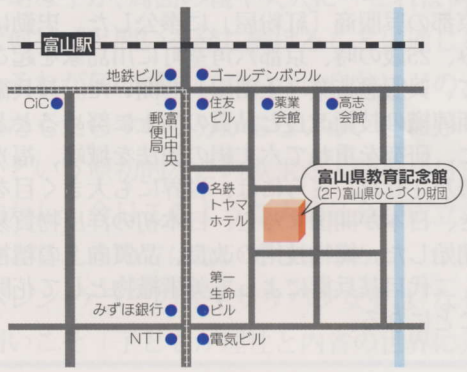
「みーつけた」

「宇宙からやってきた不思議なツバメ」

「太ようと にじ」

「海にうかぶ大きなプリン」

小学校60校、中学校４校より206点の応募があり、全作品を額装し展示しました。



あ・と・が・き

28回を重ねた「富山県版造形教育作品展」は、様々な事情により、今年度をもって終了となりました。「富山県版造形の会」の皆さま、長い間のご協力ありがとうございました。来年２月に射水市小杉文化ホールで過去作品展の全優秀作品・回顧展が開催される予定です。ぜひご鑑賞ください。